

令和元年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 大場 健哉

子どもたちは、農業科をとおしてどのような成長を遂げているのでしょうか。昨年度の作文コンクールで優秀賞に輝いた児童が、一年経った今、どのような思いでいるのか記事にしたいと取材依頼がありました。その児童は、昨年度の作文で「ぜいたくな事は、高級な物を食べることはない。ほんとうのぜいたくとは自分で作物を作って自分で食べることだ、という支援員の言葉に感動したので、一生けん命作物を育てた。」と書いていました。

取材の中では、「実際に野菜を育ててみたら、根気よく育てている分、作物にしっかりと感謝して食べるように考えるようになった。」「なんか、外見はあまりいいと思わなくても性格がやさしいとかそんなことにも気づけると思う。」と自己の変容を振り返っていました。農業科の三つのねらいとは、豊かな心の育成、社会性の育成、主体性の育成ですが、農業という直接体験をとおして自己の変容に気づく姿に感銘を受けました。農業科の実践は着実に実を結んでいます。ここまでの農業科にしてくださった各小学校農業科支援員の皆様をはじめ、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立耶麻農業高等学校様等々、多くの関係機関の皆様のご支援とご協力に対して心から感謝申し上げます。

今年度は、さらにうれしいことがありました。本市農業科の取り組みが評価され、令和元年度キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰を受賞いたしました。これまでの農業科の取り組みが

全国的にも先進的であり、また一過性のものではなく、継続した内容であることが認められたものと考えております。

今年は、市内全小学校十七校の三年生以上、千五百五名の児童が、小学校農業科の学習に取り組み、総数千四百四十九点の作品応募がありました。こんなにも多くの児童の参加があったことをとてもうれしく思います。四十五点の作品では、初めて農業科に取り組んだ新鮮な驚きや喜びが書かれているものや、食品ロスや台風十九号の報道についてなど、昨年度から審査の観点に加えた「学びの広がり」を感じる作品も増加してきました。体験から刺激を受け、視野が広がったと感じました。

本来であれば、応募いただいた皆さん全員の作品をご紹介したいところですが、大賞、優秀賞を含む入賞者四十五作品の掲載とさせていただきます。素晴らしい作品ばかりですので、より多くの方々にお読みいただければ幸いです。

おわりに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生を始め、研究会での貴重なご意見をいただくとともに、審査においても慎重に審査していただきました審査員の皆様にも感謝申し上げます。今後ともこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。作品集発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

寄稿

「言葉が生まれ文化と共に育つということ」



関東学院大学理工学部教授 佐藤幸也

一 外国語学習の前に

新年度になると小学校では新学習指導要領の本格実施が、そして長い間続いた大学入試センター試験は新たな方式になります。残念なことに、これらの施策は多くの問題があることが明らかになっており、教育現場や国民全体が不安を持っています。しかし、ほとんどの先生方は子どもたち豊かな人間性を培うため、「働きすぎ・ブラック」と言われながらも、保護者や地域の人々と奮闘しています。喜多方市教育委員会をはじめ、小学校の先生方は市民の理解と協力を糧として頑張っているように思われます。それが喜多方市「小学校農業科」の研修会や、今回の子どもたちの作文に十分すぎるほどあらわれています。安易に流されず本質を貫くことの重要性を示したものです。

これらの情熱と愛情が子どもたちの成長の土壌となっているのです。別

な言い方をしますと、喜多方の文化の力です。それらが、「小学校農業科」を通じて子どもたちに浸透し、子どもたちは支援員の方々を始めとする地域の方々の指導と協力を受けつつ自らの力で新たな文化の担い手に育っているのです。

考えてみると、これはすごいことです。中村桂子先生が賞賛したり、東大受験生の保護者の愛読書と言われる『プレジデントファミリー』に掲載されたり、地元の人々は謙遜していますが、農業科で育つ子供たちと喜多方は全国的に注目されています。12月には台湾国立暨南国際大学と早稲田大学から研究のための視察がありました。中国や香港の問題を抱える台湾では食糧自給（安全保障）と農業の教育力に対する関心が高いのです。

二 文化の創造と象徴としての言語と奇跡の日本人

文化創造の基本は言語です。日本の日常語の中に学術用語や欧米、中国など発祥の言葉もあります。歴史の変遷を経て私たちの暮らしの中に根付いたものです。海で隔絶された日本においてこの現象は奇跡的にも見えま

す。
ではなぜ理解できたのか？幕末から明治期を考えてみましょう。会津や庄内、仙台藩などでは洋学が学ばれていました。それらは、民衆の間にも

広がっていました。会津藩日新館はその水準の高さで尊崇を集めていました。当時の日本は、欧米諸国などで使われる科学、芸術などの概念を理解できるくらい人文自然社会諸科学が発達しており、日本語で現象や概念を説明することが出来たのです。

日本と世界を比較し、巧みに組み合わせる新たな用語を作り出した名手
が福沢諭吉です。他にも幕臣や佐幕派だった俊秀らは欧米の文書を翻訳し、日本語によるテキストを作成し、近代化を推進しました。概念や体験のない国々の人々は外国語で学ぶしかありませんが、当時の日本人は、論理構成や現象を見てこれは〇〇であると判断できたのです。そして日本人の当時の識字率は世界最高レベルでした。

子どもたちの外国語学習に必要なのは、先ず自然や社会、文化などを美しい日本語で表現する力の育成です。「小学生から英語」は理解しますが、多くは文化破壊につながるでしょう。そして、英語ができるから何かに有利という卑しい心根は、日本人の英語コンプレックスを助長するでしょう。英語が出来れば一流の国際人でしょうか？某国の大統領や英国の惨状を見れば分かるはずです。もうすぐ地球上の言語を即座に翻訳する手のひらサイズの機械も登場します。必要なのは中身。深く広い教養に裏打ちされた

内容です。英語は大切ですが、日本語の習得と成熟はそれ以上に重要なのです。言語力は国力に直結します。作文は知性をみがくための作業であり、他者と交わるための基本となる知的営為なのです。作文の元となる言語を豊富にすることは、

三 『言葉が勝たれるとき』（注1）

演劇人としても著名で元宮城教育大学教授であった竹内先生は幼少時代から言語の習得や表現に難儀していましたが、そこから人間の身体と心、教育についての造詣を深めました。さらに、林竹二先生との出会いを経て言葉が脳と身体全身との相関から泉のようにわき出てくること、言葉と言葉が連携しあい複雑なネットワークを形成し、発達していくことの意味を研究し、実践しました。一流の演劇人の多くは竹内レッスンの受講者ですが、彼らは演ずるときに体の芯から言葉があふれ出てくるような修業をしています。それを指導する竹内先生は、言葉が生まれる、勝たれるには文化的、教育的環境が重要だと言います。人間や社会を深く理解し洞察するということなのです。

数百万年かけて進化してきた人類が共通して持つのは言語です。しかも、それらは多様性を持っています。すでに失われた言葉もありますが、各地

域で発達し体系化されました。約1万年前に農業社会に移行した人類は文明を築いてきましたが、科学も文化も農業のたまものです。地球の生態系が複雑で多様なように、言語もその地で生まれ、人間と文明を形作ってきたのです(注2)。ルソーが自然に学べと言ったのは言葉の前に世界があることを認識し、それらを分別、整理し、知識として体内に体系化するためです。農業科で子どもたちは、まさに地球の進化と人類の歴史を追体験し科学の世界に向かっているのです。

四 喜多方の子どもたちが紡ぐ言葉Ⅱ作文

喜多方、そして日本には共通の文化と歴史が流れています。その上で子どもたちは自分自身で取捨選択して育ちます(注3)。すなわち、愛情や思いやりに包まれた中で多様な体験を重ねることが人間的成長発達を促し、生き抜く力を育てるのです。言葉はそうした積み重ねによってさらに豊かになり、世界を解釈し、文明を推進する力となります。つまり、言語は表面的な真似事で身につくものではないということです。むしろ、国際的には喜多方を語れることのほうが尊敬され、相互信頼と人間理解が深まります。このことの大切さを最も理解しているのはフランスかもしれません。

一方でクイーンズイングリッシュを話す英国人も言語の達人です。

小学校農業科は、こうした基盤を作っているのです。お年寄りも子どもたちの訪問を楽しみにしています。善意と愛情が循環しているのです。喜多方の子どもたちは、将来もつとみんなを幸せにしたいと願い行動する大人になるでしょう。彼らは故郷を愛しながらも世界中どこでも人間的信頼をもって生きてくれるでしょう。それが本物の学力というものです。農業科は本物の知性と麗しい情意を育て、豊かな人間性の基礎を耕しているのです。

注1 竹内敏晴『言葉が劈かれるとき』ちくま文庫、1988。

注2 ジョナサン・シルバータウンエディンバラ大学教授

熊井ひろ美訳『美味しい進化 食べ物と人類はどう進化してきたか』インターシフト、2019。

注3 大田堯『大田堯自撰集成 ひとなる』「教育を通しての人間研究」(第4巻) 藤原書店、2014。

入賞作品

【大賞】

落花生は地下に実る

松山小学校 五年 岩田 優里愛 12

農業科が教えてくれたこと

堂島小学校 四年 渡部 峻 13

のうぎよう科の楽しさ

姥堂小学校 三年 戸田 絢乃 14

お米を育てて分かったこと

堂島小学校 三年 佐藤 伽音 15

苦勞の先にあるもの

熊倉小学校 六年 齋藤 光 16

【優秀賞】

農業の大へんき

第二小学校

三年 佐藤

遼季

17

農業科のすばらしさ

堂島小学校

四年 花見

優來

17

生き物や自然への感謝の気持ち

塩川小学校

五年 佐藤

由菜

18

はじめてのソバ作り

第三小学校

三年 富山

里穂

19

農家の方々の思い

第一小学校

五年 菊地

爽雅

20

命のバトン

塩川小学校

六年 星

巡七

21

農業への思い

高郷小学校

四年 小林

愛奈

22

命のにんじん

第二小学校

四年 平林

大河

23

食品ロスと農業

熊倉小学校

六年 山口

佳祐

24

おばあちゃんの野菜

上三宮小学校

四年 猪俣

龍史郎

25

【農業科賞】

はじめてののうぎよう科

熊倉小学校 三年 高橋 希空 26

農業科、できたぞ

豊川小学校 三年 渡部 勝太 26

野菜大作せん

高郷小学校 三年 清野 結愛 27

かぼちゃ作り

第一小学校 四年 矢吹 向日葵 28

改めて気づいた感しや

松山小学校 四年 前田 我琉 29

ポップコーンを育てた時間

慶徳小学校 四年 佐々木 秀虎 30

大豆の豊作、カブ・大根の不作

熱塩小学校 四年 大八木 来飛 31

農業科体験

塩川小学校 四年 猪俣 百華 32

スイカはどうやって育てるのか

駒形小学校 四年 武藤 賢由 33

みんなで協力してできた米作り

加納小学校 五年 鈴木 芽琉 34

いねかりをして良かったこと

堂島小学校 五年 佐藤 羅華 35

カボチャの成長から感じたこと

山都小学校 五年 加藤 瞳依 35

米づくりの大変さ

第一小学校 六年 大八木 壺征 36

米作りと環境

第一小学校 六年 齋藤 好 37

思い出のもち米作り

第一小学校 六年 遠藤 蒼来 38

メロンを食べた時の感動

第二小学校 六年 穴澤 璃子 39

農家の人たちへの感謝

第三小学校 六年 佐藤 優心 40

米づくりの大変さ、お米の大切さ

関柴小学校 六年 羽入 楓花 41

農業にも感謝の気持ちを

関柴小学校 六年 佐藤 楓江 41

どうして農業科があるのか考えてみた

豊川小学校 六年 折笠 華子 42

算数、社会、道徳、理科は、大切なこと

慶徳小学校 六年 石田 幸大 43

ぼくが思う農業の大切さ

熱塩小学校 六年 峯岸 環 44

人との関係と赤飯くばり

加納小学校 六年 原 武 45

農業歴六年目のぼく

堂島小学校 六年 蓮沼 暖心 45

大豆を育てて

塩川小学校 六年 豊田 暖望 46

わたしの思いをみなさまに

姥堂小学校 六年 須藤 瑠来 47

弥生時代からの稲作の文化を未来へ

駒形小学校 六年 大石 舞花 48

収かくの喜びは苦勞を忘れる

山都小学校 六年 穴沢 咲大郎 49

汗を流しながらつくった作物はおいしい

山都小学校 六年 清野 萌衣 50

虫に感謝して

高郷小学校 六年 清野 翔 51

編集後記

53

【大賞】



落花生は地下に実る

松山小学校 五年 岩田 優里愛

今年度の農業科で、落花生と青豆を栽培することが決定しました。活動を始める前から落花生のことが気になってしかたありません。そこで、図書室の本で調べてみました。なんと、落花生は上の中にできる作物だったのです。青豆や大豆、小豆や枝豆などの豆類のように、地上に実ができることが普通だと思っていたのですが、落花生は明らかに違います。種を植えた後、花は地上で咲きますが、花がしぼみ、その先端が鋭くとがり、地中にどんどんもぐつていき、土の中で実ができるというのです。

「落花生は明るいところが苦手だから、土の中にできるんだよ。」とおばあちゃんが教えてくれました。わたしは、

ますます成長が楽しみになりました。

いよいよ花が咲いてきました。辺りは、ひざ下ぐらいまで草がのびていました。でも、わたしは草むしりが大好きです。なぜなら、作物のためにがんばっている自分が実感できるからです。一時間ほどみんなで力を合わせて、山のように草が集まりました。全部抜き終わって、とても清々しい気持ちになりました。

「元気に育ってね。」

そう声をかけました。

成長の様子をよく観察すると、葉の数や茎の長さ、様々な部分が成長しています。花がしぼんだ先端も地中にもぐつていきました。収穫が近づいていることを示しています。収穫当日、わたしは、とても張り切っていました。本当に土の中から落花生が出てくるのか楽しみでした。水分の無くなった茎を力一杯引き抜くと、たわわに実った落花生が三十個以上付いています。

「やった。」

感動のあまり、思わず大きな声で叫んでいました。今年の農業科の学習は自分にとって大きな収穫でした。来年は、さらに深い学びを追求していく学習にしたいと思います。



農業科が教えてくれたこと

堂島小学校 四年 渡部 峻

ぼくは、農業科が大好きです。なぜかというと、つらい思いをしたとしても、心をこめて育てると食べるときに、「あのときはつらかったけどやっぱりおいしいなあ。」

と、がんばった作業を思い出すからです。その時の感しや喜びがあるのが、農業科のとても良い所だと思うので、ぼくは農業科が大好きなのです。

田んぼの近くの草花や小さな動物、虫たちなどの身の回りの自然が少なくなってきました。ぼくはそういう自然が大好きなので、なくなってしまうのはぜったいにいやです。

堂島は、そういった自然が身の回りにたくさんあるとてもすばらしい所だと思います。

ぼくはそんな堂島でくらしているのがうれしいです。な

ぜなら、自然の中の動物たちや虫たちの知え、自分の身の回りにきけんがあっても頑張って生きようとしている動物や植物たちに、元気をもらえる体験ができるからです。このようなことを教えてくれたのも農業科です。子ども園にいた時は、タンポポの花の所だけつみ、後のことも考えずにとったタンポポをすぐに捨ててしまっていたぼくは、堂島小に入ってから、植物や生き物の大切さを農業科で学びました。それからぼくは低学年の子が植物や生き物をそまつにしようとしていたら、注意するようになりました。

また、ゲームセンターなどを遊び場にする人がいますが、ぼくは自然を一度は遊び場にしてみるのが良いと思います。自然の緑のきれいに気づいたり、じっくり観察をしたり調べたりすると、田んぼが生き物のかくれがになっていたり、色々なことに役立っていることが分かります。

農業科の学習を通して、堂島のすばらしさに気がつくことができました。ぼくはそんな自然で育つおいしい米や野菜が大好きです。堂島に生まれてきて本当に良かったと思います。



のうぎよう科の楽しさ

姥堂小学校 三年 戸田 絢乃

「えっ。」

十月になってしゅうかくをしたとき、わたしは思わず声を出してしまった。すっかりくきも葉も大きくなったさとも。思いつき引きぬくと、なんとミニトマトくらいの大さのさといもが五つついていただけだった。

わたしは、今年初めてののうぎよう科に取りくんだ。その時わたしの頭の中にかんだ言葉はこれだ。

「畑にはたくさん虫がいるからあまりやりたくないな。」

わたしは虫が苦手だ。一年生のころ畑に行ったら洋服にバツタがとんできた。それからわたしはあまり畑に行きたくなくなった。それでも、ごつ草をぬいたり、水をやったり、これまでたくさん世話をしてきた。そうするうちに、だんだんといものせい長を感じることができるようになってき

て、少し畑に行くのが楽しみになっていった。そしてついには、自分からさといものを本で調べるようになっていった。

今年の夏はあつかった。さといもは、あたたかい地方の植物なのに、いもが大きくならなかった。やつぱりのうぎようつてむずかしい。さい終てきにこんなけつかになってしまうこともあるけど、のうぎようの一番の楽しみはしゅうかくだと思う。そのためにみんな水をやったり、雑草をぬいたり、世話をするんだと思う。わたしはまだ、虫がどこからとんでくるからハラハラしながら畑で活動しているけど、やつぱりのうぎようつて楽しい。

さといもについて本で調べたとき、今年できたさといもを、来年うえることで新しく育つことが分かった。もしかすると今年とれたさといもが、来年たねいもとして使われるかもしれない。そう思うと、命をつなぐさといもの生長をもう一度見たくなった。しゅうかくのよろこびを味わうことができるように、来年ものうぎよう科を楽しんでみよう。



お米を育てて分かったこと

堂島小学校 三年 佐藤 伽音

わたしは、もう理科の学習でお米を育てました。その中で、三つのことについて分かったことがあります。

一つ目は、じょ草作業の仕方です。じょ草作業で分かったことは、ころばしという道具で、田んぼのじょ草をするということです。ころばしを使うことがむずかしくて、足がはまらないかドキドキしたけれど、何度かやるうちに楽しくなりました。土がねちよねちよと足にくっついてくるのがふしぎな気持ちでした。

二つ目は、一本のいねには百つぶい上のお米があるということです。六年生がまいたたねが、大きくせい長し、そこにたくさんのお米が実っていたのでとてもびっくりしました。そして、せっかく実ったお米を落とさないように、ていねいにいねかりをしました。ひさしぶりだったけれど、

カマを使って上手にできてうれしかったです。また、わたしのお父さんが手つだいに来てくれました。いっしょにいねかりをすると、

「かのん、上手だね。」

と、ほめてくれたので、うれしかったです。

三つめは、だっこくの仕方です。はじめてだったので、さいしよはどうやるか分からなかったけど、上級生に教えてもらい、かんたんになつてきました。六年生が足ぶみをしている道具にいねを入れてお米の実を取るのには、楽しかったです。でも、だっこくの道具は手はさまりそうで、少しこわいと思いました。また、道具を使っても取れなかったお米を手で一つぶ一つぶ取るのが、こまかくてちよつとむずかしかったです。でも、友だちとやったり、お父さんが手伝ってくれたりしたので、楽しくできました。

いな作では田うえやじょ草、いねかり、だっこく、もちつき、わら細工などのいろいろな活動をしました。みんなをやったので、どれも楽しかったです。また、来年も上手にやってみたいと思いました。



苦労の先にあるもの

熊倉小学校 六年 齋藤 光

今年の六年生は、にんじんを育てました。しかし、私はにんじんを育てることに不安がありました。理由は、三年生の時にもにんじんを育てることに挑戦しましたが、全めつしてしまったからです。でも、この経験があったからこそ、より多くのことを学びました。

一つ目は、一つ一つの作業に「大切に」心をこめるということです。そのきっかけは、わらしきの作業をした時です。水やりや除草の作業とちがい、わらしきのさぎょうは一回だけの活動でしたが、野菜を大きく育てるためにとても大切なことだと思ったからです。三年生の時には行わなかったこの手間を加えることで、雑草を防ぎ、作物に十分な栄養分を届けることができます。実際のわらしきは、想

像以上に大変で、わらを一輪車で取りに行つては、ほぐしながら優しく均等にしくというくり返しました。このような作業一つ一つに心をこめたことで、その積み重ねが、にんじんの大きな生長につながったと思います。

二つ目は、苦労の先にある「喜び」や「達成感」です。今年の農業科は特に大変でした。毎日の水やりはもちろん、除草作業も何回も行いました。夏休み中も雑草が生えないよう、陸上練習の前に除草をしました。農業科支援員さんにも除草を手伝っていただきながら世話を続けたおかげで、今年はたくさんのにんじんを収かくすることができました。それらは収かく祭のカレーやいも煮会のいもじるに入れ、全校生や家族、地域の方々に味わってもらうことができました。「おいしいね。」と言われたときにわき上がってきた。「喜び」や「達成感」を今でも忘れることができません。農家の仕事というのは、苦労の先にこのような「喜び」や「達成感」があるからこそ、おもしろさがあるのだと改めて思いました。

これからの学校生活でも苦労はたくさんあると思いますが、何事も一つ一つのことに心をこめて取り組み、苦労の先にある「喜び」や「達成感」を信じて努力していきたいです。

【優秀賞】

農業の大へんさ

第二小学校 三年 佐藤 遼季

三年生になって、じゃがいもを育てることになりました。毎年、農業かん係の勉強は、農業しえん員の方々に教わっていました。

五月、じゃがいも植えをした時に、田中さんに、ぼくは、「じゃがいもには水はあげなくていいんですか？」と質問しました。すると、しえん員の田中さんは、

「じゃがいもには、水分がたくさんあるから、水はあげなくていいよ。」と言われて、ぼくはおどろきました。草むしりでは、大りょうのざつ草がありました。ぼくは、あせをかきながら草をむしりました。草をむしる時は大へんでした。がんばってみんなでやりました。でも、ぼくは、「農業をやる人は、いつも、こういう大へんなことを、一生けん命にがんばっているんだろなあ。」と思いました。さらに、ぼくたちもがんばったら、草がへったのでうれしくなりました。

とうとうじゃがいもほりになりました。前の草むしりです。思ったことを思い出して、じゃがいもほりをしました。土

がかたくて、見つけるのがむずかしかったけれども、友達や先生ときょう力してじゃがいもほりをしました。ぼくは十一こほれました。

その後にやったサラダパーティーでは、ほったじゃがいもを使って、ポテトサラダを作りました。みんなががんばって作ったので、とてもおいしかったです。それに、農業を教えてくださいえん員さんやサラダ作りできょう力してくださいえん員さんの方々のおかげでもあると思います。じゃがいもを育ててみて、野さいを作るということは大へんだと思いました。農業を仕事としてやってる人たちは、それを毎日やっているのだと考えると、農業は大へんな仕事だと分かりました。しえん員の田中さんにはお礼の気持ちでいっぱいです。また来年もよろしくおねがいします。

農業科のすばらしさ

堂島小学校 四年 花見 優来

わたしは、農業科の活動を通して感じた事が三つあります。

一つ目は、楽しいところです。特に楽しかったのは、少しずつ育っていくなえや野菜を観察することです。種をまいて、一週間ぐらいたってから見に行くと芽が出ています。このドキドキ感が、わたしはすごく好きです。この感覚がいつまでもわすれられません。

二つ目は、大変なところです。今年の夏は特に暑かったので、ざつ草が毎日のように生えてきて、草むしりが大変でした。水もかさずにあげました。夏休みが終わると、草がわたしの身長よりも大きくなっていてびっくりしました。このような事を毎日何時間もやっている、おじいちゃんやおばあちゃんはずいと思いました。

三つ目は、自然とふれあえるところです。田や畑には、たくさん虫がいます。虫は自然の中で生きています。ですが、作物にとって虫はてきとなります。作物の一部が食べられてしまうのはかわいそうです。ですが、虫もこの世の中で生きていかなければいけません。だから、わたしたちはこのような自然とうまくつき合っていけば、たくさん自然の命を助けられるし、作物も元気に育ってくれると思います。

農業は、とてもむずかしいものです。「育てるだけ」ではなく「育てて、食べられるようになるまで」やらなくて

はいけません。今年は特に、農業の楽しさや大変さ、そしてすばらしさを実感できる一年間になったと思います。

わたしは、この堂島に住む前は、南会津にいました。小学生になって堂島小に来てから、農業科の活動がすごく楽しかったです。今までの活動を通して、農業のすばらしさと出会えるのは、小学生のうちだけだと分かりました。だからこそ、下級生に受けついで、百年先も千年先も、この農業のすばらしさが伝わりとともうれしいです。

生き物や自然への感謝の気持ち

塩川小学校 五年 佐藤 由菜

今日は、いよいよ稲刈りだ。五月の田植えから十月の稲刈りまで、とても待ち遠しかった。あの五月に植えた小さな苗があんなに大きい稲になり、実がついていることには、うれしさと、達成感があつた。

米作りをすること、稲刈りをすること、農業のなにもかもが初めてな私が、かまで稲を刈って収穫することなんて出来るのだろうかと不安だった。そして長ぐつをはき、か

まを持って田んぼの中に入った。一たば左手でつかんだとき、あまりにも量が多くて、左手で稲をおおうこともできないほどだった。大きく手を開いて、なんとかおおうことができた。右手のかまで、強く稲を切った。一度切ったら思っていた以上に楽しかった。でも、刈った後にやる「ひも結び」がとても大変だった。ひもで結ぶことなら何度もあった。くつのひもや、新聞紙をひもで結ぶときなどたくさんやったことがあった。でも、それ以上に強く結ぶ必要があつて、とても手間がかかったことを覚えている。

「もっと強く結ばないとひもがほどけるよ。」と支援員さんに言われた。そして、手のひらが痛かった。私達が、授業を受けているときは支援員さんが稲を見ていて下さった。もうすぐ夏休みだという七月のことだった。みんなで観察に行った時、一クモ、アメンボ、カエル」がいた。その時、私は、なんで田んぼの中に、こんな生き物がいるの、稲が悪くなっちゃうと思った。でも、学校に帰って、パソコンで調べてみると、その生き物は稲の害虫を食べてくれる生き物だった。私は、安心した。

私は、このことから人間の手を借りるだけでなく、生き物や太陽、雨の自然の力も借りていることが分かった。いつもなら、「いただきます。」のあいさつをする時、作って

くれた人や、動物のことばかり考えてやっていた。これからは、生き物や自然にも感謝の気持ちを持とうと思った。

はじめてのソバ作り

第三小学校 三年 富山 里徳

「さあ、畑に出発しますよ。」

夏休みの少し前、わたしたち三年生は、ソバのたねまきのため、学校近くの畑へ出かけました。

「どうやってこんな小さなたねをまくのかな。」

と、はじめてのことで、ドキドキしました。

たねまきが始まりました。みんなで、たねがかさならないうように、パラパラとたねをまきました。次に、レイキという道具で、たねに土をかぶせました。しえん員さんのいさおさんは、

「たねをふんでもだいじょうぶだよ。」

と言っていました。わたしは何だかふあんで、びくびくしながらたねまきをしました。

いさおさんは、たねまきが終わった後に、

「めは一週間で出るよ。」

と言ってくださいました。でも、夏休みに入ってしまった、ずっと畑には行っていないませんでした。

夏休みが終わって九月に入り、一か月いじょうたってからみんなで畑に行ってみました。

「わあ、まっ白な小さな花。かわいい。」

「あれっ、なんだろう。このにおい。どくとくなおいだな。」

ソバは、大きく育って、七十センチメートルぐらいになっていました。星の形のような花がたくさんさいていて、本当にきれいでした。しかも、思ったよりも、花は小さかったです。その時、よく見ると、すでに、花がかれたところに黒っぽいたねがついているのを見つけました。

そして十月に入り、いよいよソバのしゅうかくです。まず、かれたソバをかまで切り取って、それをたばにして、板にパンパンとたたいて、たねをとります。いっばいたばがあつたので、つかれました。しかも、大変だったソバ作りは、およそ一人分しかできていないことを聞いてびっくりしました。

ソバ作りの活動を通して、しゅうかくすることの大変さと、みんなで協力することの大切さが、よく分かりました。

農家の方々の思い

第一小学校 五年 菊地 爽雅

朝おきてなんとなくテレビをつけてみると、ニュースが流れていた。ぼくは、朝食を食べながらニュースを見る。

農家の人たちが悔しそうな顔で語っていた。一面にひろがった稲が横たわっていたり、ところどころ稲が飛ばされて、なくなっているところもあった。九月の台風で、農家の人たちが自分の子供のように大切に育てていた稲を失ってしまうことになった。その時は、

「あうたいへんだな。」
と、軽い気持ちだった。

学校の授業でぼくたちも、稲かりなどをやらせてもらった。

稲かりは、こしを曲げてやる作業で、ぼくはとつてもつかれながらやっていた。おわったときに、ところどころから「つかれた。」

などの声が聞こえた。農家の人たちは、苗づくりや田おこし、土づくりなどの色々な作業をしていて、ぼくらよりも大変だっただろう。それが、台風のせいですべてがなくなつた。今までずっと育ててきたものが、一しゅんにしてな

くなつてしまったのだ。農家の人たちは、悔しさや、悲しさ、苦しみを、今も味わっているのだ。ふつうだったらたえきれずなげだすはずだ。しかし、農家の人たちは、

「また、頑張るしかない。」

とあきらめずに、がんばっている。ニュースを見た人にもこの気持ちを考えてほしい。

ぼくたちは、豊子さんに教わって種まき、田植え、稲かりの体験をさせていただいたことで、農家の方々の大変さを知ることができた。また、農家の方々は、ぼくたちが知らない間にも米作りに心を配り、水の管理や草取りなどの作業に熱心に取り組んでいることを知った。手をぬけない仕事だからこそ、天候の理由で心をこめて育てている稲がいっしゅんにしてだめになってしまうのは、たえられない事だろう。これからは、天候によっても、農家の方々の思いがくずれぬように、もっと米作りが楽になる研究が進んだらいいと思う。

命のボタン

塩川小学校 六年 星 巡七

わたしたちが食べているもの全てに命がある。わたしは、今年の農業科の授業で命について深く考えた。この作文を読んでいる方々に、少しでも、私の考える尊い命について知ってほしいと思う。

初夏、わたしたちはポットに大豆の種をまいた。そのころは、この小さな種からたくさん大豆が実るとは思わなかった。それから畑に植えかえたり雑草を取ったりして五ヶ月がたった十月の日、収穫を行なった。畑を見たわたしは、息をのんだ。畑一面に大豆が広がっていた。近くで見るとさやはふくらんでいて、さやをふるとカラコロと音がした。そのとき、わたしは幸せな気持ちと同時におどろいた。この大豆は暑くても風がふいても必死でたえ、生きてきたことを。そしてその命をわたしたちがあたりまえのようにいただいていることを。いのちを受けついでいることは命のリレーだと思った。

命のボタンを受けとったわたしは、農家の方の仕事について考えた。農家の方の仕事は野菜を育てることだ。それは命をあつかい消費者へ命のボタンをわたしているのだと思った。それは、野菜だけではない。魚や肉など全てのものに命があるということだ。わたしたちは命を通してつながっている。この関係が、とても尊いものだと思えた。

最後に、わたしたちはどう生きていき、何を考えれば良いのかを考えてほしい。難しいから答えなんて分からない。それでもいいと思う。でも農業科を学んだ今のわたしは、ただいた命をむだにしないことだと思う。命のパトンを受けとったわたしは、大豆のように苦しくてもたえぬき、だれかに幸せを届けられるように生きていきたい。

農業への思い

高郷小学校 四年 小林 愛奈

農業をやっている中で、楽しかったことや、不思議に思ったこと、おどろいたことなどたくさんありました。その中で特に思ったことをしようかします。

まず、楽しかったことは、里いもをほる時に、くきを切ったことです。太いくきがあつたら、すぐに取りに行きました。シャキッ、シャキッとする音と感しよくがとても気持ち良かったです。でも、どうしてくきはシャキシャキなのに、実はとろとろでほくほくしているのだらうと思いました。

次に、不思議に思ったことは、どうしてししとうは時間がたつと赤くなるのだろうかということです。ピーマンも緑、赤、黄の順番に色が変わると思っていました。でもおばあちゃんは、

「ピーマンもししとうも、緑から赤になるだけで、黄色のピーマンはぜんぜんちがう種類なんだよ。ピーマンというかパブリカだね。」

と言われて、すぐくびっくりしました。色が変わる理由はじゆくしすぎたからだそうです。

最後に、おどろいたことです。たくさん努力しないとおいしい野菜にはならないということです。私が思っていたことは、土にひ料をまいて、種や苗を植えてから、毎日水をやるだけだと思いました。でも、土にひ料をまくだけではなく、土をたがやし、うねを作ってふかふかにします。それに、マルチビニールをしき、穴をあけ、苗や種をきんとうに植え、毎日かかさず、水をあげるのです。水をあげる時は、多すぎても少なすぎてもだめだそうです。少ないとかれて、多いと根ぐされするそうです。

農業をして思ったことは、協力して野菜を育てないといけないということです。家でもおばあちゃんとおじいちゃん、協力して収穫や苗植えをしていました。私も農業を通

して、協力しあうことを四年生のみんなと学びました。そして、みんなと活動を通して、きずなを深めることができてよかったです。

命のにんじん

第二小 四年 平林 大河

「にんじんの種、見えないぐらいだね。」

すなつぶのような、約三ミリメートルのにんじんの種をまいたのは、六月の初めでした。

ぼく達は、その小さなにんじんの種をどうやってまくのか、真剣にしえん員さんの話を聞いて、教えてもらいました。

「土の上に塩を振るようにパラパラまいて、一か所に集中しないようにまくんだよ。」

ぼくは、それを聞いて、一つぶ一つぶをなくさないように大切にまきました。でも心の中で「こんなに小さな種が、育つのかなあ。」と思っていました。

そして、二十四日後、ぼく達はにんじんのめの観察をし

に行きました。本当に種は育っているのかと思って畑を見してみると、ギザギザした細かいにんじんの葉がうっすらと見えました。めをじょうぎではかってみると、三ミリメートルのあの小さな種が七センチメートルにもなっていたからびっくりしました。

そして、夏の暑い中ににんじんのために草むしりをしました。「小さなつぶからここまで頑張って成長してきたんだからそれをむだにしない」という思いでむしったら、ぼくの身長をこえる草の山ができました

秋になり、にんじんほりをしました。ワクワクしながら引っっこめいたら、太陽のようにかがやいたにんじんが出てきて感動しました

カレーパーティー当日、ドキドキしながらにんじんをいただきました。ぷうんという香りがただよってきました。食べてみるとにんじんの甘さが濃くて、すごくおいしかったです。にんじんの命をいただいているんだと、一生けん命育ててくれたにんじんに「ありがとう」と言いたいです。

ぼくは農業科でにんじんを育てて、たった一つぶの小さな種がおいしい作物に育って、元気のもとになることを学びました。作物を食べているからぼく達は生きているのだなあと思いました。にんじんは命の恩人。いただいた命を、

大切にしていきたいです。

食品ロスと農業

熊倉小学校 六年 山口 佳祐

「おいしい。」

一年間、自分達で育ててきた野菜を食べて言った言葉です。今年も、熊つ子まつりで三、四年生が育てたじゃがいも、五年生が育てた米、六年生が育てたにんじんの入ったカレーライスを食べました。ぼくは、このカレーライスの具材は、熊倉小学校のみんなで一生命作った野菜や米から作られているんだと思い、感動しました。

にんじんを収穫するまでの活動は、簡単なものではありませんでした。一番大変だったのは、毎日の水やりや草むしりです。夏の暑い日など、毎日水やりをしないと、にんじんの葉はすぐにしおれてしまいます。芽が出たばかりのころは、雑草よりも小さい芽で、区別しながら草むしりするのには地道な作業でした。でも、毎日成長する様子を見ると、農業の楽しさを感じられるようになりました。

それからは、家でも親といっしょに田んぼの水を調節したり、畑の草むしり、水やりをしたりするようになりました。家で収めくした米や野菜を食べる時も、感謝して残さず食べるようになりました。

そんな食べ方がある一方で、今、社会では「食品ロス」が問題になっているということを道德の時間に勉強しました。農家の方が苦労して作った野菜や米が、まだ食べられる状態なのに捨てられてしまうことに悲しさを感じました。農業科を通して、米や野菜を育てる苦労や大変さ、自分たちで育てた作物を食べる時のおいしさを学んできたばかりだからこそ、食品が捨てられてしまうことに、より強く心が動いたのだと思います。

食品ロスを少なくしていくために、食品を食べる消費者と農家の人達とのつながりを大切にしていてはどうかと思えます。ぼくが農業科を通して食べ物を大切にしていくと思えたように、消費者が農業を体験したり知ったりすることで、食品を大切にする気持ちを持てるようになると思うからです。

おばあちゃんの野菜

上三宮小学校 四年 猪俣 龍史郎

ぼくは、農業科の授業が好きです。先生や友達といっしょに、外で泥まみれになって体を動かすと、とても気持ちがいいからです。

ぼくのおばあちゃんも、野菜をつくっています。野菜を作っている時のおばあちゃんは、

「つかれたな。」

「足がいたくなっちゃった。」

などと言っていますが、顔はいつも笑っています。そして、おばあちゃんの作った野菜を食べている時、家族みんな笑顔になります。

とくにおいしいのが、カブとトマトとキュウリです。カブは、塩漬けにして食べると、とてもおいしいです。トマトは、ミニトマトがすごくおいしくて、中でも黄色のミニトマトは、ぼく一人で食べてしまうほどです。キュウリは、生のキュウリをマヨネーズやみそを付けて食べると、ほったが落ちるほどおいしいです。ぼくが、おばあちゃんの作った野菜を食べているすがたを見て、おばあちゃんは、

「りゆうしろうのために、またいっぱい作るからね。」

と笑って言っています。

おばあちゃんの作る野菜は、家族の宝物です。学校で、農業科の体験をして、おばあちゃんの大変さがよく分かりました。これからは、作る人の顔を思い出し、野菜だけでなくお米などをそまつにしたり、残したりしないようにしたいと思いました。

おばあちゃん、おいしい野菜を作ってくれてありがとう。一人で大変な時は、ぼくも手伝うよ。ぼくは、おばあちゃんの作る愛情たっぷりの野菜が大好きです。

【農業科賞】

はじめてののうぎよう科

熊倉小学校 三年 高橋 希空

わたしたち三年生は、今年のはじめてののうぎよう科で、ジャガイモと、トウモロコシを育てました。

まず、うね立てをしました。うね立てをする時、はじめてくわを使いました。うね立ては、畑に引いたひもにそって、土をより上げました。むずかしかったけれど、上手にできてよかったです。

次に、マルチはりをしました。さいしよにマルチを広げて、はがれないように、マルチのわきを土でかくすようにとめました。

その後、トウモロコシのたねと、ジャガイモのたねいもを植えました。わたしは、トウモロコシのたねを植えるのがはじめてでした。けれども、けっこう上手にできてよかったです。

その次からは、毎日、当番の人が草むしりと水やりをしました。みんな、あつくてももんくを言わずに一生けん命に水やりをしました。

そして、九月にしゅうかくをしました。トウモロコシは、

カラスにほとんど食べられてしまっていたけど、小さい実が下の方にかくれてたくさんのもっていました。ジャガイモは、あまりなっていないと思ったら、土の中の方にたくさんありました。

作ったトウモロコシはお家の人にじゅぎようさんかんの時に、あげました。みんなで育てたから、とてもおいしく感じました。ジャガイモは、くまっ子まつりで、カレーになりました。家族に、

「おいしい。」

と言ってもらえてうれしかったです。

わたしは、今年のはじめてなのに、上手に育てられてよかったです。育てるのを手伝ってくださったしえん員さんや、草かりをしてくださったお家の方のたくさんのごきよう力のおかげです。来年もみんなできよう力してたくさんやさいを育てたいです。上手に育てられて本当によかったです。

農業科、できたぞ

豊川小学校 三年 渡部 勝太

ぼくは、さいしょのころ農業のことはぜんぜん知らなかったけれど、どんどん上手になりました。

さいしょは、かりんちゃんのおじいちゃんとやりました。きゅうりをうえました。きゅうりは、とくにおいしいやさいです。きゅうりがたくさんあってほしいと思いました。

夏、きゅうりを食べました。ぼくは、

「おいしい。」

と言いました。きゅうりは、手作りマヨネーズで食べておいしかったです。

次は、豆を育てました。豆も、めちやくちやすきだったので、早く育ってほしいと思っていました。豆を取る時、取りやすかったです。今回、豆は大りようにしゅうかくできました。たくさん取れて良かったです。

それから、豆のりよう理をしました。少しいへんでした。会食で、えだ豆を食べた時、

「おいしすぎる。」

と思わず言いました。おいしすぎて、三十こぐらい食べたおぼえがあります。

さい後にあずきパーティーをしました。あずきは苦手だけれど、がんばってみようと思っていました。あずきを取る時、はるくんと取りました。たくさん取ってくせになり

そうでした。かなり早く、取り出せるようになりました。

ふくろを見たら、たくさん取れていました。うれしかったです。あずきパーティーの前日、あずきをにておきました。あじ見をしたら、あじがしなかったです。まだかんせいしていないからだなと思いました。次の日あずきパーティーになりました。食かいさんたちがお手つだいに来てくれました。ぼくは、やる気が出ました。さとうを入れてまたにてあじ見をしたら思いがけないほどおいしかったです。一時間後、あんことだんごが完せいしました。みんなの力のおかげです。感しやのあんこになりました。食べたらすごくおいしかったです。あんこだんごは十三こ食べました。苦手をなくせて良かったです。

野菜大作せん

高郷小学校 三年 清野 結愛

わたしは、野さいをみんなで育てました。わたしたちの学級では、にんじん、大豆、トウモロコシを育てることにまりました。わたしは、あまり野さいがすきではありません

ん。いつも、少しのこしてしまいます。だから、少しいやになつていました。

さいしよの日は、たねまきです。マルチシートにあなをあけてたねを入れました。次の日は、めが出るまで毎日、見にいきました。めが出たら、大きくなるまで水をあげました。心をこめて水をあげました。太陽の光をいっぱいにあびて育つていきました。

しばらくして、畑へ行くと、にんじんやトウモロコシが大きくなつていました。わたしが、

「トウモロコシ早くしゅうかくしよう。」

と言うと、かのちゃんとまさ子ちゃんが、

「いいよ。いいよ。」

と、声をかけてくれたのです。しゅうかくするまでにまわりの草をむしりました。とつても大へんでした。野さいにからまつていたざつ草を全部みんなできょう力してぬきました。きょう力することはこういうことなんだと思いました。

いよいよしゅうかくの日です。さいしよはトウモロコシをしゅうかくしました。きれいなものもあれば、虫に食われていたものもありました。わたしはびっくりして、

「わあ。虫がいる。」

と言うと、男の子が、

「大じょうぶ。」

と言つてとつてくれました。次には、トウモロコシをかんそうさせて、にんじんを十本のこしてしゅうかくしました。大豆は中みがなくなつていて、ざんねんでした。家にもつて帰る時は、にんじんをもつて帰つて食べました。がんばつて食べました。わたしの野さいぎらいは、野さい作りでなりました。

「野さい大作せん大せいこう。」

わたしが大きな声で言いました。

かぼちや作り

第一小学校 四年 矢吹 向日葵

今年の農業科は、「かぼちや」です。かぼちやといえは、スーパ―にならんでいるのを見たことはあつても、種や苗を見るのは初めてでした。種はともうすぐ、ここから芽が出て、あんなに大きな実ができるのか、とても不思議でした。苗の葉っぱを見ると、かわいいハートの形で、この

苗からあんなゴツゴツしたかぼちゃができるのかと思うと、これも不思議でした。育てるのが、とても楽しみになりました。

苗を植えたり、水をやったりして観察をしていく中で、私は、初めて知ったことがあります。それは、虫が大切だということです。私は虫がきらいなので、野菜作りに必要だなんて考えたこともありませんでした。ところが、ハチなどのこん虫がおぼなの花ふんをめばなにとどけないと実がならないこと、土の中にいる虫たちがいい土に変えてくれることを知って、びっくりしました。

毎朝、登校するとペットボトルに水をくんで畑に行きました。その時、ハチなどのこん虫を見ることができず、実がなるか心配でした。でも、何日かすぎると、かわいらしい実ができてうれしくなりました。大きくなるのが楽しみです。水やり、観察を続け、七月末にみんなで収穫しました。葉っぱにかくれていて見えなかったけれど、けっこうたくさん収穫できました。

大きくりっぱに育ったかぼちゃは、ケーキにすることになりました。ゆでて、つぶしてホットケーキミックスとまぜて、すいはん器で焼きました。ふたを開くと、かぼちゃの香りがして、おいしそうでした。食べてみたら本当に甘

くて、しっとりしていて、おいしかったです。

初めてかぼちゃ作りをして、農家の方の野菜に対する思いや、虫や土の力など、いろんなことを知りました。食べ物は何でも大切に食べたいと思います。

改めて気づいた感しや

松山小学校 四年 前田 我琉

クンクン、クンクン。お鍋の中から、かぼちゃとあずきのにおいがただよってきます。

「わあ、いいにおい。」

みんながおなべの周りに集まってきました。

まず、みんなで収穫したあずきを水で洗ってお鍋に水と、いっしょに入れて、あずきがやわらかくなるまで煮ました。その間に、かぼちゃを食べやすい形に切りました。そして、かぼちゃと水をなべに入れやわらかくなるまで煮ました。だいたい一時間煮ました。煮えたら一つのなべに入れてまぜつぶしました。まぜた所に塩を二回振って、さとうを大さじ四はい入れてまぜました。お皿に盛り合わせたら完成

です。

「はあ、やつとできた。美味しくできたかな？」一口食べて見ると、すごくおいしい。かぼちゃとあずきの相しようがばつぐん。

ぼくは、この農業科の授業でいろいろなことを学びました。一つ目は自然のめぐみに感じやして食べることです。先月の台風19号では、全国各地で農作物などに大きなひががありました。ぼくらが育てていたあずきとかぼちゃは運良くひがいをまぬがれて、大きく育ったかぼちゃたちを収かくする事ができ、かぼちゃパーティーも開けて、美味しく食べることができました。

二つ目は、ご飯を作ってくれる人に感謝することです。いつも朝ご飯昼ご飯夕ご飯を作ってくれるお父さんお母さんや給食センターの人たちがいなければおいしいごはんを食べることができないので、毎日感じやしなればいけないあと思いました。

ぼくは、苗植えからしゅうかくまでの体験を通して、農作物を育てることは、とても大変なことだと思いました。これからは、農作物を作ってくださいっている農家の方々への感じやの気持ちをこめて、きれいな野菜も、がんばって食べたいと思います。

ポップコーンを育てた時間

慶徳小学校 四年 佐々木 秀虎

ぼくは、五月三十日に、初めてポップコーンと落花生の種を植えました。初めてだったのでむねがわくわくしていました。

ぼくは、ポップコーンの育ち方と落花生の育ち方が分からなかったのも、どのように育つか楽しみでした。二つともきょうみがありました。ぼくは、ポップコーンについて、くわしく観察しようと思いました。

何日かたったころ、畑に行くと、カラスが、ポップコーンと落花生を食べてしまっていました。すごく悲しかったです。でも、まだ残っているものがあつたので、ほっとしました。残っていたものから、芽が少しのびていて、うれしかったです。その時のポップコーンのなえは、八センチメートル以上ありました。ポップコーンの葉の中には、また小さな葉が生えてきていて、すごいなと思いました。

そして、七月十八日、くきはぐんと上まで上がっていました。くきの長さが一メートルになっていて、「こんなに長くなるなんてすごい。」と思いました。葉っぱも長くなっている、一番大きい葉っぱを調べると、七十七センチメ

ートルにもなっていました。くきも太くなっていました。

二学期になって、九月五日の木曜日に畑に行ってみると、実がたくさんできていました。夏休み前より大きくなっていてびっくりしました。くきが、少し黄色になっっているのに気づきました。そして、九月二十六日、ぼくは、とうとう、ポップコーンをしゅうかくしました。「早く調理したい。」と思い、むねがドキドキしていました。

十一月十九日は、ポップコーンをみんなで調理して、とても楽しかったです。ポップコーンがホットプレートの中でポンポンはねて、おもしろかったです。塩味とカレー味を作って、特にカレー味がおいしかったです。

みんなで種をまいて、ポップコーンを育てた時間は、楽しさとうれしさがいっぱいだった時間でした。農業科は楽しいなと思いました。

大豆の豊作、カブ・大根の不作

熱塩小学校 四年 大八木 来飛

この前、大豆とカブと大根のしゅうかくをしました。

去年のカブと大根は、大きくできていました。だから、今年も去年のように大きくできてほしいという思いをむねに、カブと大根の種を心をこめてまきました。種は、とても小さくて、こぼさないように、まきました。しえんいんの人たちにおそわったとおりにはまきました。あいだにも気をつけて、やりました。

大豆のなえは、六月の後半にうえました。

そして、やつとしゅうかくするときに、はじめてのことをやるときみたいに、とても、わくわくしてきました。ぬいてみると、思っていたより小さく、大根は、大きいので、筆入れぐらいの大きさでした。かぶは消しゴムの四つぐらいの大きさで、がっかりしました。みそしるを作れることを聞いて、ほっとしました。大根をいちよう切りにする時には、ぼくのママもいたので、心づよかったです。

大豆は、袋にたくさん入れて、持って帰れるぐらいのすごいほう作でした。なつとうと、とうふを作れるから、楽しみです。みそしるを作るとき、ぼくたちは、大根をつかいました。かわをむくとき、けがをしないよう気をつけて、むいたらきれいにむけました。いちよう切りをするには、ほうちようを下におすんじやなくて、前にすべらせるよう

に、おなじ細さになるように、がんばりました。

しゅうかく祭では、つけもの、大根おろしにつかわれて、来ていた人達が食べて、

「おいしい。」

という声が開けて、とてもうれしかったです。

ぼくたちが作ったかぶや大根、えだまめなどをたべてもらって、とてもうれしかったです。でも、大根やカブが、不作だったのがさんねんでした。雨が多く、暑すぎたせいで、作物もよく育たなかったことが分かりました。来年は、大豊作を期待したいです。

農業科体験

塩川小学校 四年 猪俣 百華

「んっ、んーぬけたあー。」

なかなかぬけないさつまいもがぬけてみんな大きな声をあげて喜びました。春に苗を植えて十月にやっとしゅうかくが出来ました。苗を植える時は農業科しえん員の菅谷先生から

「やさしくななめに入れるんだよ。」

と教えてもらいました。なんだか細くてたよりない苗からさつまいもが出来るのかと心配しましたが、大きなさつまいもがしゅうかく出来てとてもうれしかったです。

わたしは、さつまいもを育てて二つの事を学びました。

一つ目は、野菜には「命」があるという事です。そう思った理由は、野菜は水がないとかれてしまい、えいようがないとすぐかれて、野菜の命がなくなることを学んだからです。

二つ目は、みんなで育てたさつまいもはお店で買ったさつまいもよりおいしいことです。菅谷先生もしよう待して学校でさつまいもをあらったり、切ったり、ゆでたりして食べました。かわの所は少し苦かったけどまん中はあまくておいしかったです。菅谷先生もおいしいと喜んでくれたので良かったです。そして家に七本のさつまいもを持って帰りました。家でも学校と同じように自分で料理して家族で食べました。みんなおいしいと食べてくれて、自分で育ててしゅうかくして、料理しておいしいと食べてくれる事がとてもうれしかったです。

食べ物を育てたり、しゅうかくしたりするのは、こんなに大変なんだなあと思いました。今までは何とも思わずに

ふつうに食べていましたが、大変だと分かってからこれからは感じやの気持ちをこめて、「いただきます。」や「ごちそうさまでした。」をわすれずに言いたいです。そして大変な思いで育ててくれたんだ、作ってくれたんだと思いがら食べたいです。

スイカはどうやって育てるのか

駒形小学校 四年 武藤 賢由

五月の連休が終わってから、プール側の畑にスイカを植えました。三人グループを作り、畑に大きめの穴をあけ水をあげてから苗を植え、やさしく土をかけました。毎朝、当番が水あげに行きました。すごく暑い日が続いていたので、休み明けは土がかわいていることが多かったのです。

夏休み前に、畑の草むしりをしました。草とつるがからまっていて、草をぬくのが大変でした。葉っぱは思っていたよりも小さかったです。水はやっていたけれど、肥料が少なかったのかな、草をそのままにしていたからかなと考えました。葉っぱは小さかったけれどテニスボールくらい

の実はなっていました。

夏休み明けに、みんなで畑を見に行きました。そうしたら、スイカの実も葉っぱも見あたらなくなっていました。

これは事件だと思います。

ぼくはスイカをどうやって育てるのかを調べることにしました。と中まではスイカを育てられたけど夏休みの間にスイカがなくなっていました。ちゃんとネットもかけてあったのにスイカがなくなっていました。もしかしたら育て方がまちがっていたからなくなっていたのかもしれないと思ったからです。

さいばいのコツは高い気温と強い光をこのむので、日のあたりのよい畑で作る。また、水分の多い畑をきらうので、土をもりあげて高くしたところになえを植える。花のさく時期には、かんそうしすぎないように注意すること、と本に書いてありました。さいばいのコツを初めて読みました。スイカは水分の多い畑をきらって高い気温と強い光をこのむことも初めて知りました。今までは簡単だと思っていたけどスイカを作るのはむずかしいと思いました。学校の畑は水分が多かったかもしれないと思いました。

今度スイカを作るときはかんそうぎみの畑で作るようにします。次に作るときは、スイカが食べられるところまで

作りたいです。

みんなで協力してできた米作り

加納小学校 五年 鈴木 芽琉

私は、四月からみんなで協力して米づくりプロジェクトを行って来ました。その中で特に心に残ったのは、水生生物調査と稲かりです。

まず、水生生物調査では、六年生と組になって、小さいあみや大きいあみを使って、田んぼの中や飛んでいる虫をたくさんつかまえ、かごに入れて観察しました。田んぼの中には、コバネイナゴやコオロギ、アマガエルやアオガエルがいました。飛んでいた虫は、アキアカネ、モンシロチョウ、モンキチョウがいました。中には、オンブバッタやシウトンボがいました。いろいろな種類の虫をつかまえられるて楽しかったです。特にカエルが多くておどろきました。

次に、稲かりについてです。稲かりでは、ひもやカマを使って行いました。田んぼに行ったら、稲がすごく育って

いたのでとてもびっくりしました。なるべく、稲の下の方を左手でつかんで右手にはカマをもって稲を収かくしました。そしたら、ひもできつくしぼって、たばにしました。私は特に、いねをかる作業をしました。ずっとかっついてつかれて立つと、思っていたよりも多くかれていて自分でもおどろきました。家ではコンバインでやっているのですが、手作業でやるのは初めてでしたが、とても楽しかったです。みんなで協力できたのでとてもスムーズに作業が進みました。

最後に、収かく祭で、育てたもち米についておもちにして食べました。地域の方々、おうちの人、全校生と先生方みなさんにがんばって育てた米で作ったおもちをおいしく味わいながら、食べてもらえて、がんばって良かったなど食べながら思いました。家に帰っても

「おもちおいしかったよ。」

と言ってもらえてうれしかったです。

来年は、今年の六年生に教えてもらったことを生かして、今の四年生に分かりやすく、ていねいに教えてあげたいです。

いねかりをして良かったこと

堂島小学校 五年 佐藤 羅華

九月十七日、堂島小学校の田んぼで、全校生みんながいねかりをしました。今年から、堂島こども園の年長さんも手伝いにきました。こども園の子は初めてなので、五、六年生がサポートしてあげました。

ぼくは五月の田植えからずっと大切に育てていたいねを、九月に収穫することをとでも楽しみにしていました。今年には雨も多く土がゆるみ、いねがたおれ、いねかりをするのが大変でした。昔の人は今のようにコンバインがなく、今まで全部かっていたので、とても大変だと思いました。ぼくは家に帰ってじいちゃんに

「今日、学校でいねかりしたよ。」

と、言いました。すると、じいちゃんに、

「家では十月に入ったらやるから、羅華に角がりお願いしたいな。」

と、言われました。ぼくはうれしくて、家族のために力になりたいと思いました。

そして、十月初めの日曜日にぼくの家もいねかりが始まりました。いつもは、ひいじいちゃんとお父さんが手伝っ

ていましたが、お父さんが仕事で、ひいじいちゃんは体が弱ってしまい、手伝うことができなくなってしまいました。じいちゃんが一人でやっていたので大変だと思い、がんばってひとりで角がりをしました。小学校のいねかりで、かまの使い方やかり方は、何回も経験しているので、上手にすることができました。じいちゃんや近所のおじいちゃんに、

「羅華くん、たいしたもんだな。」

と、ほめられました。ぼくは家族の力になれてうれしかったです。学校でのいねかりの経験は、とても役に立ったと思います。

最後に、みんなで収穫したお米をおもちにして食べました。ねぼりがあり、白くてとてもおいしかったです。みんなで育てたお米は、ぼくの一生の思い出です。これまでの経験を生かして家の手伝いもがんばりたいと思います。

カボチャの成長から感じたこと

山都小学校 五年 加藤 瞳依

「あんなに小さかったカボチャが、こんなに大きくなっ

た。」私は支援員さんへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。そう思えた出来事が三つありました。

まず一つ目は、一番最初に行ったポットに種をまいた時のことです。種を一つぶもらって見たらとても大きく、青い色でした。私は不思議だなと思いました。種は茶色が多いと思ったからです。支援員さんに聞いたたら、

「病気にならないように、薬をつけてある。」

と教えてくれました。それを聞いて「大きく育って食べられるようになってるんだな。」と思いました。小さな種がどう育つのか楽しみになりました。

二つ目は、夏休みの時、カボチャの観察をした時のことです。楽しい夏休みが始まり、二週間くらいがたち、観察をしに行ったら、土が見えないほど多くの葉でかくれていました。葉をかき分け見ると小さな花や実などがあちらこちらにありました。あまりにも急な成長だったのでびっくりしました。

三つ目は、しゅうかくの時です。カボチャの実もだいぶ大きくなったので、しゅうかくをしました。カボチャをとる時のこつなどがわかり勉強になりました。それに、意外とたくさんのカボチャがとれて良かったなと思いました。ここまで、大きくて、おいしそうなカボチャがとれたのも、

みんなや支援員さんたちのおかげだと思います。

農業調理実習ではカボチャのシチューやホットケーキを作りました。カボチャを切るのは大変でしたが上手にできました。ホットケーキもうまく返せました。今までの苦ろうがわすれるほどおいしくできました。

みんなで育てたカボチャが大きくなってみんなで楽しくおいしく調理できて良かったです。私は支援員さんたちに「ありがとう。」の気持ちを伝えたいです。

米づくりの大変さ

第一小学校 六年 大八木 壺征

ぼくは、産まれてからずっとお父さんのつくった、おいしいお米を食べています。毎年お米を大切に育て、ぼくの口に入るまで本当に大変な仕事です。天気の悪い年は、お米がちゃんと収かくでできるのかと心配です。

四月の種まきから始まり、五月の田植え、夏の水管理、草かりそして十月のいねかり、もみすりとお米になるまで大変さを知っているから、ぼくはご飯を一つぶも残さないようにしています。だから

「いただきます。」

の言葉に感謝をこめています。

五年生になると、種まき用の土、二十キログラムが持てるようになり、六年生になった今は、三十キログラムのお米を一人で持てるようになりました。お父さんのお手伝いが少しできるようになったことが、うれしいです。

ぼくの住む地域では、年をとってしまいお米を作ることができなくなってしまった人がたくさんいます。毎年やめてしまう人が増えるので、お父さんが頼まれてやっています。大変な仕事なのに、たのまれてもことわらないでやっているお父さんをすごいと思います。

将来、ぼくも、お米をつくってお父さんみたいに自分の子供に、

「お父さんのお米おいしい。」

と食べてもらえるようになりたいです。そして、たくさんの人に喜多方の美味しいお米を知ってもらい、食べてほしいと思います。そんな夢ができました。

米作りと環境

第一小学校 六年 齋藤 好

私は、農業科で米作りの勉強をし、一つの疑問を持ちました。その疑問は、「環境」です。米作りをする上で環境はとても大切なことだと私は思います。

米作りをする上で必要な土、水、雨、太陽などの環境がないと植物は育ちません。

一つ目は土です。土には多くのび生物が住んでいます。そのび生物の働きによって、土は栄養をたくわえています。そして、その土の栄養は植物の栄養になります。だから、稲も栄養をもらうことができるのだと思います。

二つ目は水です。植物はほとんどが水を多くふくんでいます。水や雨が降らないと植物は枯れて育たないのです。理科の学習の発芽や成長の実験でも、水なしでは、植物は育ちませんでした。水があつたからこそ稲は枯れずに立派に育ったんだと思います。

三つ目は太陽です。植物は太陽の光がないと栄養がもらえません。つまり太陽がなければ光合成ができません。

私たちが体験した米作りでもこんなにいっぱい環境がかかわっています。このどれか一つでもなくなったら、稲

は成長できなかったのです。そう思うと、とても環境は大切なものなんだと実感することができました。そして喜多方には、「自然」がいつばいあるし、きれいな「水」もあります。この自然豊かな喜多方だったからこそできた農業科での米作りの授業だったと思います。

この農業科を通して身の周りの環境についても知ることができたし、米作りにはどんな必要な環境があるのかを知ることができてよかったです。でも、社会や国語の授業で学んだ地球温暖化の問題もあります。地球の気温が、人間が出す二酸化炭素によって高くなっていく問題です。このことが水、土などの環境に大きなえいきょうをあてています。この問題について考えながらこれからの農業に生かしていきたいです。そしてこれからも、この授業を無だにせず生かしていきたいです。

思い出のもち米作り

第一小学校 六年 遠藤 蒼来

私は、農業科でもち米を育てました。初めに、一つずつ

苗を手で植えていく作業はとても大変でしたが、田んぼに入り、どろだらけでみんなと協力して行った田植えはとてもよい思い出になりました。

歴史の授業で、米作りがすごく昔からされていることを知り、びっくりしました。昔の人は、機械を使わずに米を作り、災害などでとれなかったら、一年間苦しい生活になり大変だったと思います。何でも買える今の自分達の時代は、とても恵まれていると感じました。

毎年秋になると一小では、しきみ音楽祭というイベントがあります。午前中、学年ごとの発表を行い、午後は色々なお店が出店し、販売を行います。そこで六年生は、自分たちの育てた、もち米を売るのがこう例となっています。私はそのもち米を売る担当になりました。初めは全部売り切ることができかなと思いつながら接客をしていたのですが、いつの間にか行列ができていて、すぐに半分以上が売れていました。私はその行列を見て「こんなに多くの人が私達の育てたもち米を買ってくれるんだ。」と思うと、とてもおどろいたと同時に、すごくうれしい気持ちになりました。

私も育てたもち米を買って、きのこご飯にしてもらい食べてみました。とてもおいしかったです。私は、食べてい

るときにこのもち米は私たちが田植えや稲刈りをしたけれど、暑い日も雨の日も風が強い日も、いつも指導してくださる農業支援員さんが、一生懸命にお世話してくださったからとてもおいしいんだと思いました。今までそのようなことを考えたことがありませんでした。

農業科で田植えをするとところから、収穫し販売し、おいしくいただくまでいろいろな体験をすることができました。これからはもっと感謝の気持ちをもって、給食や家庭での食事をしたいと思いました。

メロンを食べた時の感動

第二小学校 六年 穴澤 璃子

私は、今年の夏、今まで生きてきた中で一番おいしいメロンを食べました。

「甘くて、おいしい！」

思わず声を出してしまうほどでした。うれしくて感動してしまいました。なぜなら、そのメロンは、みんなで一生けん命育てたメロンだったからです。

私は、三年生から農業を学んでたくさんの野菜をみんなと協力して作ってきました。さつまいもやじゃがいも、ねぎ、にんじんなど毎日の食卓にかかせない野菜を自分たちの手で大切に育ててきました。私の母は、「食べることは生きること」といつも話してくれます。「いただきますの意味をよく考えて食べなさい」とも話してくれます。難しくてよくわからなかったけれど、農業の授業を通して食の大切さを知ったことで、母の言いたいことが分かったような気がします。

野菜を育てることは、いつも順調ではありませんでした。今年育てたにんじんは、残念ながら中身がくさっていて、収穫することはできても、食べることができる部分が少なくなっていました。どうすれば良かったのか、研究をして来年の六年生に伝えてあげたいと思っています。

自分の手で育てたメロンや野菜から、農業の大切さ、食の大切さを学ぶことができました。命を育てることは、何が起こるか分からないことも失敗から学びました。人は、食べなければ生きていくことはできません。生きるために農業は絶対に必要です。私たちが、農業を学び、農業をもっと盛上げていかなければならないとも考えるようになりました。メロンを食べた時の感動を忘れずに、こ

れからも食べ物に感謝していきたいと思います。

農家の人たちへの感謝

第三小学校 六年 佐藤 優心

三年生から六年生までの四年間、農業科の学習をしてきました。これまでの学習をふり返り、私は改めて、野菜を育てている農家の人たちに感謝の気持ちを伝えたいです。

私は一度だけ、夜のごはんの時に「いただきます」と言うのを忘れてしまったことがあります。その時に、お母さんから、

「優心、食べる前には『いただきます。』って言わなきゃ

だめだよ。作物を育ててくれた人に失礼でしょ。」

と言われたことがあります。

私は、そのことがあってから、どうして食べる前に「いただきます」、食べた後に「ごちそうさまでした」を言わないといけないのか、考えるようになりました。

学校では、野菜を育てていて、その時に農業科支援員さんが来て、野菜の植え方や育て方など、様々なことを教え

てくださいました。

私はその時に、どうして食べる前と食べた後にあいさつする必要があるのか、お母さんが言っていたことの意味が分かりました。

それは、農家の人が大切に野菜やお米を育ててくれているからです。農家の人たちは、野菜やお米などを苦労しながら育てています。野菜が虫に食べられていないかを一つ一つ確認したり、雨が少なければ毎日のように水やりをしたり、暑い中でも大量の草を刈ったりするなど大変なことがたくさんあります。野菜やお米は、スーパーなどに行けば簡単に手に入れることができます。でも、それは当たり前のことではなく、農家の人たちが一生けん命に育ててくれているのです。こうしたことに気がついたのも、農業科の学習をするようになってからです。

これからは、農家の人たちへの感謝の気持ちを忘れずに生活していきたいです。「いただきます」と「ごちそうさま」、この二つの言葉を感謝の気持ちをこめて、しっかり言うようにしたいです。

米作りの大変さ、お米の大切さ

関柴小学校 六年 羽入 楓花

私の母は、食事の時にお茶碗にお米が一粒でも残っていると、

「まだ、残っているでしょ。ちゃんと食べなさい。」

と言ってきます。それに対して、わたしは、「こんな一粒くらい残したっていいじゃん。」と、思っていました。

でも、農業科で稲を育て、その考えが変わってきました。それは、自分で「手作業」で農業をしたからです。最初は、「めんどくさいな。どうして手作業なの。」と思っていたいました。種植え、田植え、稲刈り、と機械を使わず、農業支援員さんに教えていただきながらほとんど手作業でやります。一つ一つ種を植え、苗も手でいねいに植えます。

ちょうどそのころ、社会科で弥生時代に米づくりが始まったことを学習しました。私達がやった、種植え、田植え、稲刈りだけでなく、苗づくり、代かき、草取りも全てが手作業です。そう考えると、米づくりには、手作業が大切だったことが分かります。

また、お米は、歴史をさかのぼると、お金の役目もあり、穫ったお米を国に納め、税として扱われていました。それ

くらいお米は大切なものであり、そのお米一粒一粒が大切にされてきていたのです。

稲刈りの時、下に落ちてしまった稲やお米を見て、農業支援員さんたちが、

「大切に持って。落とさないで。」

と、言っていた気持ちがよくわかってきました。

私は、お米を「手作業」で大切に育てることで、お米に対しての感謝が生まれてきたのかなと思います。

お米を作る人の一粒一粒の思いを大切に、これからは、食事の時も、お米の一粒一粒を「ごちそうさま。」という気持ちで、大切に食べていこうと思います。

農業にも感謝の気持ち

関柴小学校 六年 佐藤 楓江

私は、農業のことなどあまり知りませんでした。大切だとも思いませんでした。役に立つなど全く考えたこともありませんでした。だから、田植えの時は、
「田植えなんて、やりたくないな。」

と、私は、ずっと口にしていました。でも、実際にやってみたら、最初のうちは、「田んぼの土が気持ち悪い。」と思つてたのに、だんだんなんだか不思議なことに、楽しくなつてきたのです。みんなで体験したこともあつたのですが、田植えをする楽しさとともに、支援員さんからたくさんのお話を聞きながら、作業できたことが楽しかったのだと思います。

農業支援員さんから教えてもらったことで一番心に残つたことは、

「ミミズは、小さな生き物でも土をきれいにしてくれるんだよ。」

という、支援員さんからの言葉です。身近な生き物が稲を支えてくれているのです。教えてもらったことは、もっとたくさんあります。例えば、「稲は風に弱いので倒れやすいこと」や「私たちが農業科で作っているこしひかりは、福井県で生まれ、今は六十二歳であること」など、とても楽しい話でした。

そんな、農業支援員さんたちとのふれ合いで、農業を身近に感じるようになりました。季節が変わるにつれ、大きくなつていく稲。とてもすごいと感動していました。

自分たちが育てた米や野菜も、農業支援員さんたちにお

世話になり、その関わりの中でさらに成長が楽しみになり、おいしく感じられるようになるんだなあと思いました。

農業のことを教えてもらつて農業のことを知り、その大切さに気づくことで、さらに、食べることも楽しくなることが分かりました。農業は、わたしたちの生活にとって、大切な命なのです。

どうして農業科があるのか考えてみた

豊川小学校 六年 折笠 華子

なぜ、喜多方の小学校には「農業科」があるのでしょうか。私の考えは、「ここは田んぼがいっぱいあるから」でした。でもその考えは二年間の米づくりを通して、ちがうものになりました。種もみまきが終わって、田起こしの時、わたしたちは最新の機械は使わずに、くわを使って、田を耕しました。田の土は少しかたく、くわを使って、耕したのでとてもこしがいたくなりました。田植えや稲刈りでも、昔の人のように手作業でやりました。ここでわたしは、「どうしてわざわざ昔の人のようにやらなければいけ

ないのだろう。最新の機械がちゃんとあるのに」と思いました。さらに、田の除草の時には、「ころばし」と呼ばれる昔ながらの機械を使いました。この機械はとても重くて、大きくて、わたしはとてもつかれました。脱穀のときに使った「足ぶみ脱穀機」も足がまきこまれそうで、こわかったです。

そして、わたしたちが一生けん命作った米は二〇一八年、コンクールで金賞をとりました。収かく祭で食べたその米は、とてもおいしかったです。その時に、自分たちの活動をふり返って、「昔の人はとても大変だったのだなあ。でも手作業だったから、より心がこもっていたのだろうなあ。」と思いました。

また、どうして喜多方の小学校には「農業科」があるのかも考えてみました。わたしが考えた結果は、「昔の人のようにみんなで同じ目標に向かってくじけずにがんばるため」かなという結果でした。わたしは喜多方の豊かな田んぼで、昔の農作業を体験できてよかったなと思っています。そして中学生になっても、農業科で学んだ「目標に向かって頑張る」を、「将来の夢に向かってがんばる」に変えてがんばっていききたいです。

算数、社会、道德、理科は大切なこと

慶徳小学校 六年 石田 幸大

ぼく達は、農業が算数、理科、社会、道德と深く結びついていることを学びました。

算数と深く結びついているところは、何丁につきどれくらいお米がとれるかや、何丁は何ヘクタールかな、などを学びました。支援員さんに質問したところ、一丁は、一ヘクタールとおっしゃっていました。とれる量は、三十アールにつき、二十八俵とれるとおっしゃっていました。また、一反で、育苗箱を十六枚使うことなど、計算が多く使われていることを知りました。

理科と農業の関係は、こやしの成分を見たら、チッ素が使われていて、チッ素は、理科で習った言葉だと思い、関わりがあることに気づきました。チッ素の他にはリン酸、カリウムが、入っていました。チッ素、リン酸、カリウムは、植物が育つのかかせない三要素だということがわかりました。

社会との関係は、農業をやる人は、減っていて、ぼくの家のように、兼業農家がいるということです。農業を教えてください。荒川さんは、コンピニのセブンと契約してお

にぎりなどに使われる冷めても美味しい「つくばSD一
号」というお米を出荷しているそうです。契約農家の良い
ところは、天候に左右されずに、必ず、お米を買ってくれ
るところです。

ぼくは、身近にあるコンビニと、荒川さんのお米と社会
がこんなふうになつて、つながっていることを、初めて知ること
ができました。

道徳と農業との関係は、道徳は、心の授業で作物に対す
る思い、祖父などから教わったことなどで、関わっている
と思いました。荒川さんは、お父さんからあることを教わ
ったそうです。それは、七月に行う、「お田植え祭り」の
やるころに、田んぼの水を一回めくということでした。そ
のことを、中干しというそうです。ぼくは、作物をつくる
だけではなく、家族の想いもつながっているんだなと思
いました。農業はとても大事な学習が入っていることを改め
て知ることができました。

ぼくが思う農業の大切さ

熱塩小学校 六年 峯岸 環

ぼくは今年で最後の収穫祭であんこもちを食べて、今ま
で一番おいしいと感じました。これは一年生から六年生
が一生けん命に、もち米を作ったからだと思いました。

もち米育てでは、四月に五、六年生で種もみをまき、五
月に一年生から六年生で協力しながら、種もみから育った
苗を一生けん命植えました。それから、苗の成長をさまた
げる雑草をとる、草とりを三回くらいやり、九月に稲刈り
をして、かわかし、脱こくをしました。

小豆は五、六年生で種をまき、収穫をし、さやかとり
ました。もち米もあずきもみんなで一生けん命がんばって
育て収穫しました。

不思議に思ったことは、やっていることは去年と同じな
のに、おいしさがいつもより、おいしいと感じたことです。
ぼくは、いつもより夏が暑かったり水が少なかったりした
から、むしろ、いつもよりおいしく思うだろうと思ってい
ました。でも、おいしかったのです。ぼくは、それは、一
年生から六年生までが、いつも以上に一生けん命にがんば
って育てていたからだと思います。また、自分が小豆や田
の作業に、いつも以上に思いをこめていたからだと思いま
した。

ぼくは、今年で小学校を卒業しますが、この熱塩小学校

には農業科を受けついदैってほしいと思います。なぜかという、この給食は地元で収穫したものを使っているし、今は食品ロスなどが原因で農家の人々が減っているからです。ぼくは、農業科に取り組んで、農業の大切さや、命の大切さなどをたくさん知りました。この学校の人々には、農業の大切さを、実感してもらいたいです。

人との関係と赤飯くばり

加納小学校 六年 原 武

ぼくの学校では毎年みんなで作ったもち米を赤飯にし、一人暮らしの方の家へ届けにいきます。そこではいつも同じ言葉をもらいます。それは、ありがとうございます。

「こんにちは、加納小の五、六年生です。」

こうあいさつをして、渡すと満面の笑みをうかべて、

「ありがとうございます。おいしくいただくね。」

と言って受け取ってくれます。その笑顔を見たときに温かい何かに包まれた感じがしてとてもうれしくなりました。ふと、今までの事を思い返してみると、「大変だったけどやってきてよかったなあ。」という気持ちになりました。

暑い中やってきたことに対して、大変だったなという気持ちから、やってきてよかったなという気持ちに変わりました。

学校に帰ってから、みんなで作った赤飯を食べました。とても温かく、つかれがすうっと消えていきました。一口一口食べていくと一つ一つつらかったこと、おもしろかったこと、そして赤飯を渡した人のうれしそうな顔などたくさん思い出がよみがえってきて、頭の中がいっぱいになりました。

ぼくは毎年やっている赤飯づくり、配りから、つくった物を通して互いの気持ちが通じ合うことが分かりました。その気持ちの中には、感謝の気持ちがあったり、おいしく食べてほしいという気持ちがあったりします。この気持ち伝わることによってみんなのきよりが近づいていくことも分かりました。こうした活動が増えていくことで人と人とのきよりが近づいていくといいなと思いました。

農業歴六年目のぼく

堂島小学校 六年 蓮沼 暖心

ぼく達の堂島小学校では、先ばい達からの伝統を受けついで、農業科の活動を続けています。一年生のころは、何も知らなかったぼくですが、今年で農業歴六年目になりました。

今年もお借りしている田んぼで、全校生が協力して米作りをしました。種まき、田植え、除草、稲かり、脱穀まで、支援員の皆さんに教えていただきながら自分たちでやりました。

一、二年生のころは、どろの中にはだしで入る時、気持ち悪くて、歩くのが難しくてふらふらしました。どの活動も、やり方が分からなかったので、上級生や支援員の方に教えていただきながら、なんとかやっていました。

でも、今はちがいます。ぼくが下級生に、「苗は二、三本取って、十字になっているところにグシャッと植えるんだよ。」と優しく教えられるようになりました。その他にも「ころばし」を使って、草とりを一緒にやってあげられるようになりました。

ぼくの家は、農家ではないので、堂島小学校でなかったら、米作りを体験することや米作りについて学ぶことは一生なかったと思います。

ぼくの家では、自分達が食べる分だけのほんの少し、な

すやピーマンなどの野菜を作っています。でも、おいしい野菜に育てることはとても大変で、うまく育たない時もあります。除草や水やりなどの世話をしている家族を見て、本当に大変だなあと 생각합니다。少しの野菜を収穫まで育てるのも苦労があるのだから、たくさんのお米を作る苦労はぼくの想像をはるかにこえることでしょう。

ぼく達が、毎日おいしいお米を食べられるのは、農家の方々の苦労のおかげです。長い時間とたくさん愛情がなければ、おいしいお米は育たないことを、農業科の活動を通して学ぶことができました。おいしいお米をお腹いっぱい食べられることは本当に幸せだと思います。一生けん命に作ってくれる農家の方々に感謝して、ご飯をいただきました。

大豆を育てて

塩川小学校 六年 豊田 暖望

「へえ、枝豆が大豆になるのかあ。」

農業科の時間、育てている大豆が枝豆になってびっくり

している私に友達が教えてくれました。私はずっと枝豆と大豆は別物だと思っていて、植えまちがったのかなと思つてしまうほど豆についての知識がありませんでした。逆になぜみんなは知っているのかと不思議でした。

私はあまり野菜を育てたことがありません。あるといつても、まだ一、二年生のころやこの農業科の時間だけです。だから今年も農業科のこの時間が楽しみでした。大豆は小さなポットに種をまくところから始めて、苗植えをしました。土には虫がいっぱいいて、虫が嫌いな私にとってとても楽しい時間とは言えませんが、この土は虫が元気でいられるいい土だなと思つてがんばりました。少ない農業科の時間で畑へいって、草むしりなどをしました。雑草がいっぱいあって大変だったけれど、大豆の葉は雑草と比べて大きいし、ざらざらしているということを知つて、雑草をぬくときに、分かりやすかったです。けれど農家さんたちはこの大変な作業を何回もやっているのですごいなと思ひました。

十月ごろ、ついに収かくする時がきました。草むしりをしていたところは緑色だった枝豆やくきもかれてカラッとしていました。こうして大豆になるんだなと知つて自然にこなるのってすごいなと思ひました。いっぱいあるさやを

取つて持ちかえりました。この大豆できなこを作ります。すごく楽しみです。

なかなか野菜をつくったりしない中で、農業科の時間は楽しかったです。枝豆が大豆になることも知つて、あまりやらないことをすると新しいことを知れるので貴重な時間だったと思ひました。小学校六年生で、もう農業科の時間は来年はないけれども、また野菜などを育てたりする機会があつたら育てたいです。

わたしの思いをみなさまに

姥堂小学校 六年 須藤 瑠来

わたしは、あの時まで「いただきます」や「ごちそうさまでした」に、あまり喜びや感謝をこめずに言つてしまつていました。

あの時というのは、改めて農業をする時、田植えをした時です。農業の時間になると、いつもわたしは

「いやだな。」

と言つてしまいます。でも、改めて農業について考えてみ

ました。その考えにわたしは気づかされました。それは、「農業をやると、いも煮会の時に入れる食材になるし、世界には何も食べられない人もたくさんいるんだよな。」という考えだったのです。そう考えた時から、私の胸は感謝でいっぱいになりました。

ほかにも、わたしにはたくさんさんの喜びがあることが分かりました。それは、農業科支援員さんがやり方を教えてくださったり、実際にやってくださったりしたので、たくさんさんの野菜をとってみんなでおいしく食べることができました。わたしはとても喜びであふれました。このことによつて「いただきます。」や「ごちそうさまでした。」を言う時に感謝や喜びをこめてあいさつができるようになりました。たくさんさんの人々のおかげで、わたしたちは毎日かかすことなく食べることができています。そのみなさんの協力に感謝や喜びをこめ、いつでも、これからも「いただきます。」「ごちそうさまでした。」を大きな声で明るく元気にあいさつをし、心をこめて、残さず食べられるようにしたいです。また、これからはあまり農業をやることはなくなってしまうと思います。でも、

「楽しいな」
や

「早くやりたいな」
と思えるようになり、喜びをもう一つ増やすことができたのでよかったです。

弥生時代からの稲作の文化を未来へ

駒形小学校 六年 大石 舞花

五月、「ついに稲作が始まる！」私は、とても楽しみでした。六年生になり、社会で歴史を学ぶようになりました。そのときに、中国から日本に稲作が伝わったのは、弥生時代だということを学びました。だから、弥生時代から伝わる稲作に、今年もたずさわることが出来ると思うと、とてもワクワクしたのです。

私達は、稲作体験をするとき、苗は手植え、除草にはこるばしという道具を使い、稲刈りは、かまを使って行いました。でも今は、稲刈りをするコンバインや、精米機などの機械があります。そこで私は、思ったことがあります。それは、今のような機械が存在しなかった弥生時代。田植えや稲刈りの仕方は知っていますが、精米や炊飯の仕方は

分かりませんでした。そこで、どのように行っていたのだろうか、とても気になったので、インターネットで調べてみました。

精米は、木で出来た堅臼と堅杵を用いて、かんそうした稲の穂を臼に入れ、杵でついてもみがらをむいていたそうです。炊飯は、土器に多くの水を入れ、米を入れて、火にかけていたとみられています。また、蒸す方法もあったとみられ、おかゆのようにして食べていたそうです。

このことから私は、「昔の稲作は多くの手間がかかったのだな。先人はいへんな苦労を積みかさねてきたのだからな。」と思いました。現在は、昔は手作業で行わなければならなかったことが機械で出来るようになってきています。それは、先人が何度も何度も改善をして、次の時代へとバトンパスをすることをくり返してきたからだだと思います。先人が次の時代にバトンパスをするとき、たくさん期待をこめていたはずですが、逆にバトンを受けとる側は、よりよくしようと思う気持ちであふれていたと思います。私もこのようにバトンを渡そうとしている人がいたら、快く受け取り、未来を担う人間になりたいです。

収かくの喜びは苦労を忘れる

山都小学校 六年 穴沢 咲太郎

ぼくたちは、今年の五月に農業科の授業でスイカとキュウリ、さといも、じゃがいもの種をまきました。ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんが、ハウスでミネラルキュウリをさいばいして出荷しているので、小さいころからキュウリがどのようにして作られるのかは知っていました。でもスイカは一度も見たことがなかったのもとても楽しかったです。この小さな種があんなに大きくてあまいスイカになると考えただけで、わくわくしました。

スイカの種は、今までで見た事のある種の中でも一ばん大きかったです。その種をポットに一つづつ入れました。これから芽が出たら畑にうえ替えしました。ポットから出すときに土と芽がばらばらにくずれそうなのでしんちように畑の土の中までうつしました。この日から畑の手入れとして、草むしりに行きました。むしっても、次にまた行くとたくさんはえているので、栄養がすいとられないようにいっしょうけんめいむしりました。支援員さんにあまいスイカにするひけつを教えてください、その方法が子づると孫づるを切っていくことだと知り、ぼくは少しおどろきながら切

りました。切ってなえをキズつけたら成長が止まってしま
うと思ったからです。

こうして八月の夏休みあけにとうとうスイカはしゅうか
くできるまで、大きくなりました。ずっしりと重く、色が
ピカピカと光るスイカで、いい音もしました。

「なにこれ。」

と大きなさけび声と笑顔で、ぼくはうれしく感じました、
重さをはかったら十一キロもありました。やっと家に持ち
帰ったら母に、

「どうやって持ち帰ってきたの。」

とおどろかれました。ぼくは、自分たちで作ったスイカが
りっぱにそだって早く家族に見せたい気持ちが大きくて重
いと感じませんでした。農作物を作るといことは、喜ん
で食べてくれる人がいるからいっしょうけんめい作るんだ
と知る体験になりました。

汗を流しながらつくった作物はおいしい

山都小学校 六年 清野 萌衣

私は、六年生になってスイカとキュウリ、サトイモ、ジ
ヤガイモを植えました。私が初めて育てるものばかりでし
た。それぞれをよく観察すると、サトイモの苗は形が大き
く、そして太く育ちそうでした。キュウリの苗も想像より、
みずみずしくてびっくりしました。なかでもスイカが気に
入りました。なぜかという、スイカのたねは、青色で今
までで一番大きい種だからです。大玉スイカの名前らしく、
大きな実をつけそうです。ポットに種を植える時に、「ど
のくらい大きくなるのかな。どんな味になるのかな。」と
気になりました。

夏休み中に草取などをして、やっと食べられる大きさに
なりました。しえん員さんに頼んで畑でスイカを食べまし
た。スイカを切った時真っ赤でみずみずしくておどろきま
した。六年生は、スイカの苗を植える時に支援員さんに
「鳥などにいたずらされないように白い糸をはる。」と教
えていただいたので効果があったと思いました。スイカの
かんしょくは、さらさらしたり、さらさらしたりしていま
した。他に、私がびっくりしたことは、直径十センチメー
トルくらいのスイカを切ったら中身が赤色の部分と種がな
くて白かったことです。みんなどんな味か気になっていた
ので代表して二人が食べるようになりました。私は「何も

味がしない。」と思いました。そして代表した二人がおもいつきスイカにかぶりついたらすぐに大きな声で、

「すっぱい。」

とさけびました。白い部分は何なのか、とても気になりました。私は、支援員さんになぜすっぱいのか聞いてみると、赤いスイカの下の白い部分ということがわかりました。私は「スイカが大きくなるにつれて白い部分が赤くなっているのだろう。」と思いました。

私は、汗を流しながら育てた作物の味は最高だと感じました。これからも、野菜そして自然の恵みに感謝したいです。

虫に感謝して

高郷小学校 六年 清野 翔

「うおー ミミズだあ！」

虫やミミズの嫌いなぼくにとって、農業科の学習は、とてもいやな時間でした。でも、六年間農業科の活動をしているうちに少しずつかわってきたのです。

そのきっかけの一つはミツバチです。夏野菜の手入れをしている時、たくさんのミツバチが飛んでいました。ぼくは、根っからの虫嫌いなので逃げ回っていました。でも、友達逃げ回っているぼくに

「翔君、ミツバチはね、花粉をめしべにつけてくれているんだよ。ミツバチが花粉をつけてくれないと実ができないんだよ。」

と教えてくれました。そう言われて、よく見てみると、確かにミツバチは花から花へと飛び回って、花粉を運んでいるように見えます。怖いと思っていたミツバチだったけど、一生懸命飛び回って、花粉を運んでくれていると思うと、何だか、とてもがんばりやさんのえらい虫に見えてきました。

二つ目のきっかけは、四年生の時、畑に苗を植えていた時のことです。移植ベラで土を掘っていたら、ぼくの大好きなミミズが出てきました。ぼくは、思わずミミズに土をかぶせて隠してしまいました。僕の行動を見ていた先生が

「ミミズは、土の中のものを食べているんだよ。そして、食べたものを分解してフンをするでしょ。そのフンが作物にとっていい肥料になるんだよ。」

と教えていただきました。ぼくは「人間でいうリサイクルだなあ。」と思いました。ぼくの大っ嫌いなミミズも、気づかないところでぼく達のために活躍しているんだと感じました。

そんな体験を繰り返していくうちに、ぼくの虫を見る目がかわってきて、ぼくの虫嫌いは少しずつ薄れ、今は、虫があまり気にならなくなってきました。そして、虫をよく見るようになり、虫やミミズの活動に感謝する気持ちを持つことができています。

令和元年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】

関東学院大学教授
喜多方市教育委員会教育長

(敬称略)
佐藤 幸也
大場 健哉

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長
喜多方市PTA連絡協議会長(駒形小学校 PTA 会長)
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査
会津よつば農業協同組合喜多方営農経済センター営農振興課長
喜多方市小学校農業科支援員
喜多方市農業委員会委員
喜多方市産業部農業振興課長

阿部 秀樹
尾崎 武史
半澤 勝拓
星 保宣
和田 清正
山田 義人
木戸 賢治
大堀 邦英

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科活動推進員

佐藤 毅
齋藤 勝芳
山中 溪

編集後記

今年度から農業科担当となり、小学校全17校全ての圃場を見させていただきました。どの学校からも、栽培計画に基づいた種まき、田植え、観察、除草、収穫の様子が伝わってきました。そこには、子どもたちと支援員さん、そして先生方の笑顔があふれていました。観察することから生まれる発見や疑問、時にはくやしさも味わったことでしょう。この場所で、豊かな実りと、豊かな学びが生まれたことは農業科の大きな成果と考えます。

支えとなったのは、支援員の皆様の力です。子どもたちの見えない場所で年間を通して、ご尽力いただいたおかげと感謝申し上げます。教育委員会には全国各地の市町村から視察の申し込みがあり、農業科について話を伺いたいという要望があります。その中でも、支援員さんと子どもたちのふれあいの時間こそが今求められている時間だとわかったという感想がありました。

今年度は、小学校17校で1449点の応募がありました。全ての作文に、子どもたちの農業科への思いが綴られています。全ての作品を紹介できないことが残念ですが、この作文集に代表作としての45作品が掲載されています。今年で11回目となる作文コンクールですが、審査をされる方は迷いながらの審査をしていらっしゃると思います。子どもたちの作文には、読み手を感動させる力があるのです。その力の源が「体験」です。農業科という学びは豊かな自然体験と人間関係が生み出しているものだと感じました。

私にとって、喜多方市の農業科という取り組みの大切さを再認識できた一年であり、子どもの学びを応援する社会、大人にならなくてはならないと感じた作文コンクール審査でした。

1449名のみなさん！素敵な作品をありがとう！

(学校教育課 課長補佐・指導主事 齋藤 勝芳)

令和元年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

令和2年2月 発行

喜多方市教育委員会

